第三章　ジュピター・ステーションでの攻防

2023/1/22　追加・修正 by OHYABU

修正・追加部分は赤字で表記

（一）

「どうやらホイヘンスには、人材を見抜く力があるようです」
暗室でニックが、空間に浮かびあがった大きな惑星の画像を見て言った。
惑星には大赤斑が見える。木星だ。
「どういうことだ？」と、横にいたビッツがたずねる。
彼らが所属する軍事部は、防衛部と改称された。
中央ユーラシア区にあるのは、地球国軍事部改め地球国防衛部の拠点。その司令塔ビル。ここも防衛部本部ビルと改称された。
防衛部本部ビルは、平原の中の開けた、だだっ広い滑走路の真ん中に立っていた。周囲には宇宙船を収納できる建物がちらほら。
ビル内の地下作戦会議室での、最高司令官二人だけでの密談だ。
「つまり……」
そう言ってニックは、大赤斑のすぐ横にある大きな影と、そのまわりに散らばる小さな影を指さし、
「離れた衛星から映している画像のため、不鮮明ですが、たしかにピネロンの戦闘用宇宙船です。現在三十台ほどが確認できました」
「……増えたな」
「はい。どれも木星の引力に引きずられずに、こうやって大きな影になってるわが方のジュピター・ステーションにくっついていってます」
「うむ……」ビッツは首をかしげ、「信じられん。木星エリアでは、ピネロンの宇宙船はまともに動き回れないのではなかったのか？こちらの誘導なしには、いつもまともに動けなかったではないか」
「だから……人材なんです」
ニックは神妙な顔で、続ける。
「先ほど、ステーションをあけわたせば中にいる要員には危害は加えぬとのホイヘンスからの期限なしの通知をお伝えしましたが……そこに、イモシという名の科学者の署名もありまして」
「イモシ？」
「私も初めて聞きました。ラフラス夫妻に師事したとの注釈がわざわざ入れられておりましたので、科学者に確認しましたところ、何人かはその名を知っておりました。夫妻よりもずっと年上ですが、最近まで部下としてつかえていた者のようです。裏方に徹してたようですが、技術面でのサポートは常に完璧だったようで」
「うむ……」
ビッツは腕を組み、目を閉じた。

少し考え込んだあと、静かに目をあけ、「つまり威嚇か？優秀な科学者のもとで、木星の磁力や引力に対応できるように宇宙船を改良しているんだと」
「そう思います。おまけに向こうには、わが方の技術者が大勢拘束されておりますから」
「技術者は、ほとんどが無名なだけに、捕虜交換対象ではなかったからな」
「うかつでした。補給船への攻撃が行われるまで、今回の事態に気づけなかったとは……」
「うむ……」
ビッツはふーとため息をつき、映像を見ながら、あごひげをいじりつつ、
「ではなぜ、一気に火星エリアから攻撃をかけてこんのだ？」
「木星に注意を引きつけておいて、すきを見て一気に火星エリアから攻撃をしかけるというのでは？」
「君もそう思うか？それでも……それでも、ステーションのあけわたしだけはできん。地球攻撃への足掛かりにされかねん！」
「……たしかに。あるいは、木星資源確保のための拠点にすることも、念頭に置いてるのかもしれません」
「……だな。それに危害を加えぬとの言葉も信用できん！あの捕虜交換の時のことを思えば」
「期限をもうけてないのも、ある種ワナだと思います。こちらが渋れば渋るほど、戦力をつけられるとの腹なのでしょう」
ビッツは、またもふーとため息をつき、
「それでも……すぐにはムリだ。大艦隊を出さんと叩きのめせないだろうが、こちらの攻撃体制が整うまでは……。注意をそらすための時間稼ぎをせねばならん。少々荒っぽい手を使ってでも……」
「荒っぽい？」
ニックの問いにビッツはひとりうなずき、厳しい顔で腕組みをして、考えこむ。

捕虜交換後、戦局はよりピネロン側に有利となっていた。
火星エリアにある三つのワームホームのうち、まだ占領されていなかった二つのワームホームのうちのひとつが、とうとうピネロンの手に落ちた。ピネロン側の出入口にある地球基地が占領されてしまった。
そのため、二つのワームホールの地球側の出入口周辺では、突然の侵入に備え、常に戦闘機が何機も警戒に当たらざるを得なくなっていた。
これで、火星エリアの地球に残されたワームホームは例のＲ２のみに。ただ、先の捕虜交換のさい一部が破壊されたトーカサス星の基地の修繕のため、しばらくはそこからの本格攻撃はないだろうと分析されていた。
代わりにピネロン軍が攻撃体制で現れたのは、すでにワームホールすべてをあけわたしていた木星エリア。わたってきても、木星の強力な磁場や引力によって実質ピネロン側は動きが取れない――そう判断していた地球側にとっては想定外の事態であった。
資源開発のための民間の宇宙船はもちろんのこと、軍の宇宙船もすでに退却していたが、

地球側の軍人数十人が、すぐに退却可能な宇宙船一台とともに、ジュピター・ステーションに残っていた。

〈逸失の日〉以降、ワームホールが開いたのは、地球とピネロン星との間だけではなかった。

地球と木星との間にも不安定なローカル・ワームホールがあることが発見され、それをとらえての飛行が普及した。かつては片道だけでも何年もかかっていたのが、ひと月以内に短縮されることとなった。危険な小惑星帯を通る危険からも解放された。

ただそれには、気まぐれなワームホームをとらえねばならず、つながる場所もかかる日数も、毎回大きく変わった。そこで毎回の通行データを記録し、ホールの場所を予測しての航行に変更。効率は多少は改善していった。

とはいえ、ステーションへの補給が不安定なことには変わりなく、今はさらに、ようやくエリアに到達してもピネロンの宇宙船と戦闘機が待ちかまえている事態に遭遇していた。

彼らは以前とは比べものにならない俊敏な動きで攻撃してくるのだ。船の数も徐々に増えていき、そのため最近では、地球から向かう補給船には護衛船が何台も必要となり、それでも半分が撃ち落される事態となっていた。

ただし、ステーション本体への攻撃はいっさい行われなかった。

にらみ合いは長期戦に入っていた。

そうなると、逆に補給を絶やすわけにはいかない、という現実に突き当たる。

メディアは一丸となって、ジュピター・ステーションでの攻防を、フィクションを混ぜてまでして報道した。補給船とその護衛船も、実際にはできるだけ人的被害を抑えるために無人宇宙船が多く投入されるようになっていたにもかかわらず、すべて人が乗った船だとして、架空の彼らを地球のために戦う無名の英雄として、あらゆる持ち上げ方をしてほめたたえた。

北米にあるソクラトン邸からは海が見えた。港も見える。その港に近い大通りに面した喫茶店。

クラシカルな店内で流されるのは、軍歌のような勇ましい音楽。テーブルに座ってコーヒーを飲んでいた神経質そうできゃしゃな小男は、うっとおしそうに顔をゆがめた。

「うさんくせぇねな、なあマック」

すると、横に座っていた横に座っていたでっぷりした大男が不思議そうに、

「なにがや？パイク兄ぃ」

「つい先日までは、融和だ平和だ共存だと言ってたのによ」

「だけど楽しいじゃないかよ。血がわき踊るってか……」

「だったら、もっとわき踊るようなコーヒーを出せってよ。まだ配給にもなってないってのに、豆ケチりやがって」

と、パイクはチラリとカウンターの店主をにらみつける。

店主は無視して顔をそらす。

パイクは、はぁとため息をつき、
「火星の方もヤバいと聞くし、志願兵だけじゃ兵の数が足りねぇだろうよ。おそらくまもなく徴兵だ。お前も俺もひっぱられるぞ」
「そりゃやべぇ」
「やべぇのは俺らの暮らしもだよ。ここ北米の政府機関はみんな軍事部……いや今は防衛部ってんだったよな……そこに吸収されちまった。広報部も治安部も交通部も。特に広報部押さえりゃ情報操作は完璧よ。おかげで俺たちゃ飯の食い上げだ。しがないゴシップもマニアックなネタも、すべてご法度とくらあ！
そればかりがこうした庶民の楽しみの場所も、今に閉鎖だ。まっちがいなくそう仕向けられる。こうやって胡散臭い音楽を楽しげに使われてな」
「そりゃやべぇ。なんとかならないんで？」
マックの無邪気な質問に、パイクは首を横に振り、
「御用財閥もからんじゃ、太刀打ちできないわな。娘まで大統領に仕立てあげてるぐらいだから……っと、その御用財閥も地雷踏んじまったが……」
「兄ぃ！！」
マックはパイクの背中をこついた。
まわりから、胡散臭そうに睨まれている。
マックはおびえながら小声で、
「やべぇっすよ悪口は、今はどこにでも盗聴器が……って、キター！」
マックは窓を指さすと、大勢の軍人がこちらに向かってくる。
「ひええ！」
「あわてるな！あっちだ」
道路を隔てた向こう側の通りで、異変が起こっていた。
いつのまにか人垣ができていた。
そこに、軍人たちが割り込んで入っていった。
人波が揺れて人々が散り、軍人たちと、ひとりの青年が残った。
青年はピーターだ。
かぶっていた帽子をはがされると、まわりにいた何人かが彼のこめかみを指さした。
パイクとマックのところからは、何を指さしているのかは見えない。
しかし人々の様子を見て、マックはグーした右手で左の手のひらをポンと叩き、
「ああ、ピネロンマーク、ピネロン人か！」
パイクは、静かにしろとばかりに小声で、
「違う、耳の形を見てみろ」
人々の怒号が、店内にまで聞こえてきていた。
ピーターは、軍人に腕を持たれ、腕のＩＤ時計を調べられていた。
他の軍人は、自分のＩＤ時計からどこかに連絡をとっていた。
――やがて、事態はおさまった。
軍人たちは、ほとんどがその場から離れていった、
なんだハーフかよ、と店内から声が聞こえてきた。店内から様子を見守っていたのは、パイクとマックだけではなかったのだ。

ハーフも収容所に入れればいいのに、との声も。
とり残されたピーターに、つばを吐きかけたり罵声を浴びせたりする者たちの姿も見えたが、治安維持のためその場に残った軍人たちに追い払われ、やがて人々は何事もなかったかのように歩き始める。
「ハーフは逮捕されないんで？」とマック。
「地球人と認められてるからとかいうが……ってか、本当は収容施設が足りないからだとかと言われてるな」
「奴らみんなスパイってホントか？」
「なわけねえだろ！みんなガキだぞ……って、おや？」
今度は、急ブレーキをかける音だ。
ピーターがいる近くに、ひときわ大きい黒塗りの車が止まる。
そこにいきなり、車に駆けよる子供連れの女性。
何かを叫んでいる。
パイクとマックは耳をすます。
「……シリカスの妻です！夫を……返して……！」
車から何かを答えているかもしれないが、その声までは聞こえない。
「夫……返して……くれませんから……きたのです！」
通りを歩いている人々も、再び何事かと立ち止っていた。
「夫を返してください！」
次の瞬間――
パンという音がして、女性は道に倒れた。
泣き叫ぶ子供の声。
パイクは、う～んと唸り、
「あの車は軍のおえら方のだな。もしかしたら総司令のビッツが乗ってるのかもしれねぇな。ほれ、近くにソクラテスだがソクラトンだがといった御用学者の家があるだろ？最近お忍びでよくここいらに来てるようだから」
「よく知ってるなぁ」
「ったく、なに言ってやがんだ。俺らジャーナリストのはしくれじゃねぇか！ポンコツだけどよぉ。……あ、それにシリカスって、ジュピター・ステーションの副艦長の名だ」
「くわしいな」
「ったく、最近のニュースで何度も出てくるだろ！」
「う～ん……返せって、地球に戻せと？」
「ダンナの命を救えと言ってるんだ。イザとなれば帰ってこられる宇宙船があるのに、使わさないんだろうよ」
立ち止まっていた人々は、やがて、なにごともなかったように動きはじめる。
そんななか、母子に近づくピーターの姿が。
人々からの関心が離れていたピーターは、倒れた二人を助けようとしたが、初老の夫妻が駆け寄るのが早かった。
ピーターは、二人が立ち上がるのを見て安心したのか、その場を去っていく。
一連の事態をぼおっと見ていたパイクは、つぶやく。

「おめぇにゃ言ってなかったがな、この席周辺には盗聴器はねぇんだよ」
「え、どうしてわかるんで？」
「いちいちチェックできる機器をもらってるんだよ」
ぽかんとするマックをしり目に、パイクはつぶやく。
「ったく、いやな世の中だ。またスカッとした仕事をもらいたいぜ」
「あの時のようにデマを流すんで？」
パイクは首を横に振り、「犬になるのは本望じゃねぇよ。しかも今の体制に不満を持ってる連中の犬になんかなぁ、危なっかしくって……。だけど、飯のタネがないことにはどうしようもねえからなぁ。
この星の闇ってのは結構深いんだ。〈逸失の日〉を境に何があったのやら。俺らは生まれてねぇけどよ。ピネロンの闇の時には、なんとか生まれてたんだけどな」
「ピネロンの闇？」
「……お、連絡だ」
パイクはカバンを少しあけた。
「さすがにこれは検知されないからなぁ」
そこには、大きなラジオが入っていた。真空管で動く代物だった。

（二）

ピーターが歩いた先は、港だった。
大きな船が、幾つも並んでいた。貨物船ばかりだったが。
上空からは時おり轟音が。監視のための飛行機が、飛び回っているのだ。
（なんで、こんなところにまで呼び出して……道まで指定してきて……）
それでも、目的地に着いたことでホッとした。
緊張がほぐれたところで、一気に思い出した。
――敵国人！
――ピネロン星へ帰れ！
先ほど浴びせられた罵声に、体を震わせる。
怒りよりも、不安と恐怖。
胸が苦しい。
それでも母を守らないといけない、母には自分しかいないんだ、と言い聞かせる。
（しっかりしろ、今の自分にならそれができるんだ！）
そう念じながら、海を見やった。
波はおだやかで、日の光がモザイクのようにキラキラ放たれていた。
（母さんは海が好きだった……）
ピネロン星には、このような美しい水の風景はないという。母は川も湖も好きだったが、とりわけ海が大好きだった。
サクラも好きだったが、水の花であるスイレンも大好きだった。
水を映す青い空も……。

（ん？）
ピーターは空を見上げ、ハッとなった。
柱が定間隔に建っている。
そこから監視カメラが出ているのがわかった。
ピーターは顔をゆがめ、ぐっと帽子を押さえた。

「大丈夫です、あれは今、君を映してませんから」
背後からの声に、ピーターは驚いて振り返った。
ロペスだ。
軍服姿で、手には何かを抱えていた。
アイスクリームを五、六個抱えていた。
「ひとつどうです？」
「は？……あ、い、いいです」
「溶けちゃうから全部食べますよ」
あっけにとられるピーターを尻目に、パクパクかぶりつく。
「子供の頃は、何も食べるものがなかったからですからね。木星育ちですから」
「へ？」
「ぼくは引揚者ですよ。帰ってきたときは本当に、食べ物がおいしかった。特にコレは大好物になって」
「え？でも……」
〈逸失の日〉は、父ロバートの年齢と同じく、今から四十二年前の出来事。
引揚が完了したのはそれから二年後。だから引揚者の年齢はおおよそ四十歳以上だと聞いていた。
しかし、彼はもっと若い。
そんな疑惑の視線を感じてか、「疑問あれば、機会があれば話します。まずは食べさせてください」
と言うやいなや、手も服も汚さずに、あっというまに平らげてしまう。
ますますあっけにとられるピーター。
ロペスは落ち着いたのかホッとため息をつき、柱を指さして、
「あれはね、津波防止用なんですよ。〈逸失の日〉のような被害をもたらさないようにとの。一昔前に各地に作られましたが、すべてムダになりましたね」
「ムダ？」
「津波がくれば、瞬時にエキゾチック・マターを出して柱をつなぐ壁にして波を防ぐって……ったく、何考えてたんだか……エキゾチック・マターが無限で万能だと考えられてた時代の遺物ですね。放射能物質を封じ込めたり、建築資材をつくりだす助けにはなりましたけど、それ以上のものではなかったばかりか……。
まぁ、ああいう遺物でも、今は監視カメラを取り付けて、それなりに役立ってはいますけどね」
「……僕を写してないって？」

「ニック副司令のご実家はね、海洋資源の開発を一手に担ってるんです。今は妹さんご夫婦が会社を継いで、南ユーラシア区に本社を置いている。そこから全世界の港にネットワークを張りめぐらせてる。この港もそのひとつで、しかも直轄地だ。なにもリース財閥だけが産業を独占しているわけではないんですよ。

……で、今は限定監視です。君をはずすようにしてます」

「あなたは会社の人間なんですか？」

「まさかまさか！事情はおりおりと。それより、ここに来るまでにずいぶん嫌な思いをさせたようですが」

「見てたんですか？」

「でもあの道筋なら、少なくとも人間以外からは盗撮されません。今は閉鎖空間より逆にこういうところの方が安全ですしね。ここなら安心して言いたいことが言えますよ」

そう言ってロペスは、急に鋭い視線をピーターに向けた。

まだこの人のことは信用しきれないと、ピーターは感じた。それでもとりあえず、彼の言うことに従うことにした。

「僕が聞きたいとあなたにお願いしたのは、母のことです。先日の捕虜交換からはずれていたことはあとで知りました。今はどこに？……今もローレル島なら、どういう状況にいるんでしょうか？教授にもまだくわしい情報は入ってないようなので」

「……たしかに、総司令と副司令の会話を盗聴しても、その件は出てこないでしょうしね」

「あなたは……」

ピーターはまじまじとロペスを見つめた。

父が映像の中で言っていた、信用できるかどうかわからないサポーターとは、この人のことなのか？

かまわずロペスは続ける。

「心配しなくてもいいデス。本当に君のお母さんは丁重に扱われてます。つい先日集中治療室から出たところ。それはシアル伯父さんにも伝えてます」

「じゃあ、記憶も元どおりに？」

ロペスは首を横に振る。

「だったら僕に会わせてください！せめて、島のどのあたりにいるかだけでも」

ロペスはさらに首を横に振り、「教えたら君は確実に乗り込んでくるでしょ？」

と言って、首をかしげてにやりと笑った。

これでピーターは確信した。彼は父を知っている！

それならば――

「あなたは……あの時僕を止めたのは……あなたですか？」

「なんのことですか？」

「しらばっくれないでください！あなたは、僕や父のことをどこまで……」

「お母さんのことを話しましょう」

――またもはぐらかされた。

ロペスはまたも首をかしげた。これは彼の癖なのだろう。

「君のお母さんのお兄さん、つまり君の伯父さんのレガイテ・シアルは、ホイヘンス政権を支える官僚として生き残りました。お母さんの弟で、かつて頻繁に地球にも来ていた若

手科学者のチャウ・アブラハムは、現在行方不明。重要な研究資料をもって逃げてるのではとの憶測が出ています。
　お母さんが違ってはいても、きょうだい皆優秀ですね。上が官僚で、真ん中が女優で翻訳家で、下が科学者。そんなところですかね。どちらにせよ、君のお母さんは今や地球にとって重要人物です。君の母親だけではおさまらない」
　ピーターはまじまじと、ロペスを見つめた。
「僕を挑発してるんですか？」
「期待してるんです。ぼくは君の監視役ですから」
「え？」
「君も当然、地球にとっては、危険分子にもなりうる重要人物。ソクラトン教授が人道的理由だけで君を保護しているのではないことは、おそらくはわかってるはず」
「！」
　胸にずしんと響く。それはもはやピーターにもはっきりとわかっていた。
　ロペスは続ける。
「ただ実際には監視はゆるい。それが教授が人道的と言われるゆえんですが……だからもう一重の枠をはめよとの命があり、ぼくが監視にまわされたのです」
「ニック副司令からの命令？」
　ロペスはにやりと笑った。それでピーターは察する。
「あなたたちはどういう関係で？」
「それはおりおり。ただぼくもあの人もそんなに単純ではないデス。ぼくが知ってることをあの人が全部知ってるわけではない。あの人が知らないぼくもいる。それに……」
　ロペスは深呼吸をし、またも鋭い視線をピーターに向け、
「戦地にあらわれたなぞの人物、遊星仮面については、国をあげていまだ調査中です」
「！」
「正体がわからず評価すら定まっていない以上、メディアにも報道させていない。ピネロン側も、この件については、想定以上に慎重です。捕虜交換時のことをたがいにうやむやにしたい意図もあるんでしょうが……」
「……」
　ピーターは、胸に手を置き、なんとか心の動揺を抑えようとしていた。
　ロペスは、あえてなのか、そんなピーターから視線をはずし、
「ともかく今は微妙です。個人的事情からカッカして動かれると、かえって事態の悪化をまねく。それでも動くというなら覚悟が必要です。一般民衆も知るところとなり、「事実」が勝手につくられていきますから。
　そうした「事実」が個人的事情にとって不都合なものにならないようにするには、こちらから先に「事実」をつくるしかない。冷静に、戦略的に、あのようにエキセントリックに」
「？！」
「最大の覚悟は、ひとりでは神になれない、神になるには手を汚さないといけない、恨みや誤解や誹謗を一身に受けないといけない、そういうことです。覚悟がなければ何も果たせない。そういうことだけは肝に銘じておかれるように……では！」

「……ちょ、あ、どこへ！」
「すみませんね、時間です。帰りは必ず来た道を帰ってください。君は頭のいい人だからわかるはず。これは命令です！」
ロペスは、一方的に話を打ち切り、その場を去って行った。

（三）

（なんなんだ、いったい……）
ピーターは、ロペスとの会話から吹き出した不安や疑問に押しつぶされそうになりながら、ソクラトン邸への帰途についていた。
ロペスの態度は、父が何に巻き込まれのか、本当に死んだのかを確かめたいという自分の思いへの、露骨な横槍だった。
トロント市に行けば何かわかるかもしれない、今の自分にならピネロン星になど簡単に行けるはずだと考え始めていたのに、それを見透かしたように、勝手なことはするなと釘を刺してきた。
同時に、エキセントリックに動けという。
（あの人は、僕に何をしてほしいというのか？）
そう考えると、次に湧き上がってきたのは怒りだった。
一方的に上から目線で転がされ、単なるコマにされているような感覚が、尊厳を傷つけられた怒りへとつながった。
（くそっ、振りまわされてたまるか！）
高まる感情に、思わずドンと扉を開いて、ソクラトン邸内に入った。
中は静まり返っていた。
どうやらソクラトンは外出しているようだった。
ということは、ソニカとリンダは、またあの部屋にこもっているのか。

レザーが連れ戻した少女、アルテイカ・ソニカは、今はソクラトン邸にかくまわれていた。
純然たるピネロン人だが、地球生まれの地球育ち。歳はピーターとレザーのひとつ下。ピネロン語の教師として地球に来た両親のもと、ひとり娘として生まれた。母親は彼女が物心つく前に病死。父親は、同胞を支える互助組織の責任者として名が知られており、そのため常に忙しく、彼女が言うには幼い頃は、父親同士が同じ教師仲間だったこともあって、近所のレザーの家によく預けられていたという。
強制収容のさいには、レザーの父親が二人をかくまったらしいが、自分の弟であるキニスキーには隠し通せなかった。軍に拘束され車で移動中、ソニカの父親は車内から転倒。事故死だった。原因は車のドアの閉め忘れだったと。
その悲劇は、多くの人々の目の前で起こってしまった。
彼は一部の地球人にも知られた人物だっただけに、人権派などからの非難をおそれた軍

は、ひとり残された娘を「人道上の配慮」という名目で、移送が困難なマリアの代わりにピネロン星に送還することを決める。ある意味厄介払いとも言える処置だ。
マリアは返せないが、代わりに著名な民間人の遺児をひとり返す。そうホイヘンスに伝え、了解を得ていた。（というか、ホイヘンスにとってはどうでもいい話だったようだ。）
そうした措置は、ソニカ本人にとっては迷惑、いや悲劇でしかなかった。
言葉もうまく話せないうえに、身寄りもいないピネロン星へ送還されたくないとの嘆きを聞いて、レザーが独断で助けに向かったようだ。
宇宙船内で隠れていたが見つかって、ソニカを連れて外に飛び出したが、あとは記憶にないと言う。目覚めた時初めて、彼女とともになぜか地球に無事帰ってきていたことを知るのだ。
その後ピーターは、渋るレザーをソクラトンのもとに連れて行き、事情をすべて話し、ソニカの保護を求めた。
送還が急だったので送還名簿に彼女の名前が載せられていなかったことと、軍の関心が髪の長い謎の不審者に集中してしまっていることもあって、ソクラトンは承諾した。
ただし条件がつけられた。
人の出入りの多い邸宅だけに、戦況が長引けば隠しきることは困難だとソクラトンは真っ先に言った。ここでの滞在は、より良い条件での拘束に切り替えられるまでの一時保護にした方が現実的だと。そのためなら自分はあらゆる尽力をも惜しまない、ただしこの件はビッツには一言伝えておく、と。
これにはレザーは激怒したが、ソニカは納得した。ピーターは、ソクラトンに頼るしかすべはないと感じ、レザーを説得した。
レザーは、消しがたい不安と不満を感じながらも、ピーターにすべてを託し、去って行った。
彼には、より困難が予想された叔父キニスキーへの対応が待っていたのだ。

今の自分には何もできないことは、ピーターにはわかっていた。
親友のためにできることは、ソニカを守ることだけ。
そう念じつつ、邸宅の中に入って行った。
広い邸宅のちょうど真ん中には、ぶ厚い壁で四方を覆った大部屋があった。ソクラトンの亡き息子夫婦がかつて使っていた音楽鑑賞室で、防音は完璧。
そこには、今はピアノだけがぽつんと一台置かれていた。ソクラトンが今回ピーターを引きとるに合わせ、知り合いから譲り受けてくれていたものだった。家が焼けてマリアのピアノまでも焼けてしまったことへの配慮からであった。
ピーターもたまに弾いていたが、今は別のあるじにとって代わられていた。
部屋の扉を開けると――
ピアノの連打。
高らかな歌声。
床一面に散らかる五線譜。

ピーターはレザーから聞いていた。ソニカは見かけは可憐な美少女だが、中身は飛び抜けた変わり者だと。
五線譜とペンがあればいい、五線譜がなければ紙と定規とペンさえあればいい、それだけで彼女は生きていけると。
そのとおりに彼女は、床に座り込み、五線譜に秒単位で楽譜を書き込んでいた。しかも、さまざまな楽器の分を含めた多次元な楽譜を。
ピーターは驚いて彼女に聞いたことがある。なんでそんなに速く作曲できるのかと。
しかし彼女によると――作曲しているのではないのだと言う。そんなことができる心境ではないので、今はただこうやって静かに音楽を聞いているのだ――と。
じつは今の地球では、音楽や映像はパソコンからダウンロードしないと、見ることも聞くことも できなくなっていた。国による監視の徹底である。防音がなされた室内で歌ったり楽器を弾くことにはなんの問題もなかったが、外部と電波のやり取りをすることは、特に彼女の場合危険がともなった。
自由に音楽を聞くことができない。そのため、記憶しているあらゆる楽曲を多次元に楽譜に落とし、ピアノ以外の楽器の音色を想像しながら「聞く」作業をしているのだと彼女は言う。
ピーターにも、いやおそらくレザーにも理解しがたいことであったが、リンダは違った。
彼女はソニカにぴったりと寄り添い、ソニカから楽譜の読み方を覚え、そして歌った。
ピーターは、リンダが歌がうまいことに驚いた。
絶対音感が身についており、音程に狂いがないのだ。
「ピーターさん、ピアノ私よりずっとうまいのに、どうしてリンダちゃんのために弾いてあげなかったの?」
ソニカは少し非難するように言った。
ピーターは苦笑するしかない。
知らなかったのだ。リンダが、母のことを思いつつピアノを弾く自分にずっと遠慮していたことを。息子夫妻の死を悲しむ祖父の悲しみを広げないために、あえて歌を歌わないでいたことを。
そんな気遣いで引きこもっていたリンダを、ソニカは解放した。
リンダはうってかわったように明るくなった。人形を持ち歩くこともなくなり、どこか自分に自信をつけていった。
このことで、もちろんソクラトンは喜び、ソニカの保護により一層気を配るようになっていった。

今日も防音の空間で、ソニカとリンダは仲の良い姉妹のようにたわむれていた。
リンダは、ピアノはうまく弾けなかったが、それでも必死で鍵盤をいじり、歌を歌っていた。
その横でソニカは、「うまいうまい」と言いながら、時に彼女に楽譜をわたしていた。
楽譜を見ながら、ピアノを弾きながら、リンダは歌う。
二人は没頭していて、ピーターには気づかない。

ピーターは遠回しに二人を見ながら、ふとロペスを思い出した。
彼も、おそらくはソニカがここにいることを知っているはず。
ただ彼は口外はしない――その点だけは確信がもてた。
（このままなら、大丈夫だ……）
安心したピーターが、二人に声をかけようとしたところで――
「ピーター」
振り返ると、ソクラトンだ。
「教授？帰ってらしたんですか？」
ソクラトンは指に手を当て、静かに、と諭しながら、部屋の外へとピーターを誘導する。
ピーターは、静かに部屋のドアを閉めた。
ソクラトンは、はぁと深いため息をついた。あきらかに困惑していた。
ピーターはたずねる。「なにかあったんですか？」
「レザーとかいったな。彼が兵役につかされたそうだ」
「……え？」
「表向きは志願兵ということらしいが、実際には……」
「……じゃあ、ソニカのことは？」
ソクラトンは首を横に振り、「居場所まではガンとして語らなかったようだ」
「ああ……」
逆らう者への報復。そこまで……そこまでキニスキーは、自分の甥を許せないということなのか？！

（四）

そのキニスキーは、ビッツとニックがこもる作戦室にいた。
「キニスキー少尉、君はだめだ。木星には行かせられない」
そう諭すビッツに、キニスキーは反論する。
「なぜです！私が行くことになっていたではないですか！」
「今の君ではダメだ！危険だ！」
「どういうことです！何が危険なのです！」
「君は自分の甥を徴兵し、さっそく木星に送り込もうとしていたそうではないか。それこそむざむざ殺させにいくようなものだ」
「……それは」
「よいか、新兵は許さん。足手まといだ。少なくとも銃がまともに扱えない者など送り込ませない。これは原則だ！」
「しかし……」
「言っておくが、わしは君の甥が、捕虜交換の時の不審者のひとりだったとのうわさなど信じてはおらん。うわさを流す者は今後罰する！」
「そ、総司令殿、ですが……」
「キニスキー少尉」横からニックの声が響く。「総司令のおっしゃることを素直に受け入

れるんだ」
　キニスキーはギロリとニックをにらみ、ふうと深呼吸をした後、覚悟を決めたように低い声で、
「私は直接甥から聞きました。ピネロン星に送還されそうになってた女を助けるためだったと。そんなことで国を危機にさらして……」
「だから、そんなことは総司令は信じてないと、おっしゃってるのだ！」
　ニックは少し声を荒げて言った。
　キニスキーは顔をゆがめ、今度はビッツを見た。
　そのビッツはニックに対し、ゆっくりとうなずく。
　ニックもビッツにうなずき、そのうえでキニスキーに対し、
「「事実」は時にはつくられることもある。それを受け入れなければいけない時もある。わかるか？今後は君もそれを学ぶことだ」
　強い調子で言い切ったあと、さらに鋭い視線をキニスキーに向け、
「それと、話は別だが、こんな時だからこそ言っておく。ピネロン人収容のさいには、母親から幼児や赤子を引き離してはいけない。国も大統領もわれわれも、そこまでのことをしろとは言ってない。児童施設が困ってる！」
　キニスキーは、見たこともないニックの厳しい反応に少し戸惑いながらも、抵抗は忘れない。
「だったら、児童施設を充実させるよう行政部に、あるいは大統領に頼めばいいのです」
「キニスキー少尉！」
「あるいは、収容所を増やして、混血児もすべて収容所に送れとの命令に変えてください。私にとってはそのほうがいい。汚れた血ははねればいいのです。スパイの根は絶てばいいのです！」
「それが危険なんだと……」
「私は無骨な軍人です。あなたのように文学で許されることができるような人間ではありません！……甥のことも、誰も裁かないのなら私が……」
　キニスキーの声は完全に裏返っていた。
「キニスキー少尉！」堪忍袋が切れたビッツが大声を上げた。「国益ではなく私情にかられるようなら、木星行きは絶対に許さん。他のすべての職務からも、しばらく離れてろ！」
　これにはキニスキーはあわてて、「ま、待ってください。私は国に背いた甥を、国のために尽くさせようとしただけです。それに私が木星に行かないと、部下たちが……」
「冷静さを欠いた今の君では、その部下たちを守りきれん。まともな職務も期待できん。少し頭を冷やせ！わしの命令があるまで待機せよ！命令だ！」
「……あ」
「命令だ！」
「は！」
　キニスキーはぐっと唇をかみしめ敬礼し、その場を去った。

　ビッツはあごひげをさわりつつ、困惑げに、

「現場判断は柔軟なのに、なぜああも原理原則には頑ななのか。甥の件は国益上不問に伏すと、暗に言っておるのに、ほんに理解できないというか……」
そして、ふうとため息をつき、「まあ、ソクラトン教授から、娘の保護を聞いていなければ、こういう処分には出られなかったが……」
「二人をどうする気で？」
「どうやって地球に戻れたのかの大問題は残るが、本人たちに記憶はないし、われわれも余分な仕事をしてるヒマはない。あいつは言われずとも甥の監視をするだろうし、娘はしばらく教授にまかせる。そんな例外も国益の上……と言っても今のあいつには理解できないだろうなぁ」
「身内だけに、どうしても許せないのでしょう」
「頑固な宗教指導者の血というか影響というか、その根だけは振り落せんときとる。君に対しても……」
「彼でなくとも私たちのことは、気にする人間は気にしますよ」
「わしは気にしないがな」
「ありがとうございます」
「それより、レガイテ・シアルとの交渉はどうだ？」
ニックは首を横に振り、
「ホイヘンスはなぜか、〈彼ら〉全員の画像を要求してきているようです。送らない場合はすぐに攻撃をしかけるとまで」
「〈彼ら〉の画像を？」
「真実かどうかを知りたいのでしょう。」
「〈彼ら〉の存在は、向こうでは公然の秘密だったのでは？」
「一部の関係者しか知らなかったようです。軍人あがりのホイヘンスは知らなかったのでしょう」
「うむ……」
ビッツは腕を組み、目を閉じ、考え込む。
やがて――
「ならこちらもその画像を使わせてもらおう。〈彼ら〉の存在を、ホイヘンスだけではなく一般のピネロン人にも知らせるのだ」
「ええっ！」
ビッツの提案にニックは青ざめた。
「ま、待ってください、それではレガイテ・シアルを追い込むことにもなりかねませんし、われわれの正当性にも疑問符が付きかねなくなります！」
「……今はこの手しかない。向こうの国民が〈彼ら〉の存在を知ることになれば、ホイヘンスもおくびには手を出せまいよ」
「しかし……」
「〈彼ら〉を盾に使うことは、君も同意したではないか？」
そう言ってビッツは、ギロッとニックをにらみつけた。
このにらみを押し切ることが容易ではないことは、すでにニックは学習済みだった。
――やむをえない。

「わかりました。しかしどうやって、ホイヘンスの監視をすり抜けて、向こうの国民に知らせるのです？」
「リース財閥が使っていた機器がステーションに残されてたはずだ。彼らが使っていた周波数なら、軍事用ではないから警戒なしにピネロン星に届けられるのではないか」
「一民間企業にこれ以上巨大な権限を持たせるのは危険です」
「それはリース財閥だからか？君の実家ではなく……」
「私の実家であっても、こういう形での権限拡大は諸刃の剣です」
「……なるほど。だが今回はやむをえんよ。アデル大統領への連絡はわしがつけておこう」
「彼女も巻き込むのですね？」
「当然だ」
「わかりました……」
ニックは顔を曇らせながらも、うなずく。
「こういう機会に、キニスキーをはずすのは痛いが、やむをえまい。あの精神状態ではな」
ビッツも顔を曇らせていた。

そのキニスキーは、自家用車の中にいた。
（くそ、ピネロン人め……）
運転しながら考え事をしていた。
（遺伝子操作までしてわれわれと混じって何になる？彼らがエキゾチック・マターをもたらせたことで、地球は何を得た？彼らが大勢大挙して地球に来たことで、おばあ様も親父も……。そして今度の戦争だ。われわれは災いしか受けていない。……レザーまでも惑わすとは！）
感情は乱れていた。しかし運転にはまったく影響していない。
実務能力が高いうえ、宗教色が濃い背景もあってか裏切りといった行為を毛嫌いし、忠実で、主観と客観の切り替えが明確にできる――それが、ビッツから重用されている理由でもあった。
それでも今の彼の頭は「主観」にあふれていた。
（あれほどあの娘とは別れろと言ったのに……。どこかに囲まれているはずだ。必ず見つけ出してやる……）
そして、ふと何かに気づく。
車をいったん止め、進行方向を変えた。
その先には、ソクラトン邸が。
静かに車を止め、邸を見やる。
わずかに音楽が聞こえてくる。
（もしや……）

音楽は、防音室から響いていた。
ソニカが、フルートによく似た、漆黒色の横笛を吹いていた。

よく通る高音の澄んだ音色。
ピーターとリンダが、目を閉じ聞いていた。
やがてソニカは吹き終わる。
拍手、拍手。
「すごいわ。おねえちゃま。ピアノ以外の楽器も使えるのね」
「こっちの方が得意よ」
「楽譜書きなぐってるだけじゃないのね」
「まぁね……あ？」
ドアを指さす。少し開いていた。
ピーターはあわてて、ドアを開いて外を見た。
異状がないことを確認し、大丈夫だとうしろの二人に指で合図したあと、ゆっくりドアを閉める。
「ごめんなさい、わたし気づかないで」
リンダはうろたえていた。
「違う違う、私がさっき閉め忘れたのよ」
ソニカのくったくもない笑顔に、ピーターはドキッとし、胸が熱くなった。
彼が心を乱す横で、少女たち二人ははしゃいでいた。
「おねえちゃま、それなんて楽器なの？」と、リンダがくったくなくたずねる。
「これはアルギナ。土のようなものでできてるの」
（え！）
ピーターは顔をあげた。思わず声をあげそうになった。
彼の動揺に気づかず、ソニカは続ける。
「ピネロン星は地球に比べて地上に住めるところが少なくて、土地も多くが不毛で、多様性もなくて文化もないって言われてるらしいけど、文化はもっぱら地球からもたらせられたものだなんて言われてるけど……それは違う！大昔には、音楽や踊りが得意な人たちがいたらしいって。これはその人たちのものらしいのよ」
――その話は、ピーターも母マリアから聞いて知っていた。
アルギナという言葉も知っていた。
しかし笛の名前ではない。
アルギナの人たちの躍りだと言って、マリアはよく踊ってくれていたのだ。
あの後ろ向きからの登場シーンも、地球の言葉に訳せば〝人呼んで〟とか〝惑星仮面〟とか〝遊星仮面〟とかといえる口上も、彼女を通じて知ったものだった。
ただしそうした言葉も姿も、ピネロン人の前では絶対に見せるなと、母は常に言っていた。
だからこそあの時トーカサス星で、母がいると信じて、見せたのだ！
消されタブーと化した人々とその文化。それをなぜ母が詳しく知っているのかはわからない。しかしそのことがどうやら、彼女と彼女の祖父との確執を生んだらしかった。
ソニカは続ける。
「黒い髪と黒い瞳で、肌の色も私たち一般のピネロン人より濃かったんだって。そんなの地球じゃ珍しくはないけど……。ピーターさんもお母さんから聞いたことはないの？」

ピーターはハッとした。
「い、いや特に」――とりあえず今は黙っておこう。
「昔のことだけど……」と言ってソニカは目を閉じ、「私はピネロン人なのに、ピネロン星のことはほとんど知らない。父はほとんど家にいなかったから。言葉もちゃんと覚えられなかった。音楽も地球の音楽しか知らない……。
でもこの笛がある。この笛をメインにした新しい音楽をつくれれば、何かが変えられるかもしれない。レザーさんもそう言ってくれたわ。なのに私は……」
そう言って、ソニカは顔を下に向け、辛そうに、
「私がピネロン星に行きたくないだなんて言わなかったら……」
「……」
レザーが徴兵されたことは、すでにソニカに伝えられていた。
彼の叔父がどういう人物かを彼女はよく知っているだけに、隠すとかえって彼女の精神を乱し、さらに自分たちとの信頼関係にヒビが入るからとのソクラトンの判断からであった。
とはいえそのことによって、ソニカは罪の意識を背負うことに。
ピーターは……リンダもだが、できるだけ彼女の心を軽くさせるよう、常に心がけていた。
そのため、
「大丈夫だ」と彼女の肩に手を置き、「少なくとも木星行きからははずされたらしい」
「木星行き？」
「戦場には行かずにすむ」
「え？」
ソニカの顔色がみるみる変わった。「ど、どういうこと？」
「だから、あそこはまもなく戦場になるって、ニュースでも……」
そう言いかけてピーターは、ハッと気づいた。彼女は情報から隔絶されたところにいるのだ。
そこであらためて、自分が知っていることではなく、一般に報道されていることを彼女に伝えた。
「――だから、ジュピター・ステーションを守れるかどうかにかかってるんだ」
ソニカは真っ青な顔で、顔をひきつらせていた、
「そんな……じゃあ、みんな逃げ切れたのかしら」
「……は？」
「父は事故に巻き込まれる直前まで、ジュピター・ステーションにいる人たちのことをすごく気にかけてたのに」
「……誰がいるんだ？」
「ふつうのピネロン人よ。数十人はいる。もっと増えてるかもしれない」
ピーターは、彼女の言葉がすぐには飲み込めなかった。
ジュピター・ステーションにピネロンの民間人がいるなどとの話は、どこからも誰からも聞いたことがない。
「本当よ！」ソニカは訴える。「私の父は何度もボランティアで行っていた。ひそかに住

み着いてる人たちがいるの！子供もたくさんいた。だから……そうだわ、きっと逃げ切れてないはず！」
「おねえちゃまの知り合いもいるの？」と、リンダは心配そうにたずねる。
ソニカは首を横に振り、「でも父の知り合いの人たちよ。だから誰か……誰か、みんながどうしてるか見に行ってほしい……」
肩を震わせながら彼女は言った。
それに対しピーターは、ゆっくりとうなずいた。

（五）

ホイヘンスも驚いていた。
「あんなところに民間人が隠れてたとはな。地球人から残飯でももらって暮らしてたというのか……？」
と、ぼうぜんと天井を見あげる。
「ホイヘンス様、何をお迷いで？」とイモシ。（顔にはいくつものひっかき傷が！）「なぜ連中の画像を求められたのです？！あのような者たちなどさっさと切り捨ててしまわれていれば、こんな事態にはならずに……」
しかしホイヘンスは、イモシの話など耳に入らないようすで、ひとりごとをつぶやき続ける。
「レガイテは知っていたのか？まあ知ってたとしても無視するだろうな」
と、天井を見あげたまま、苦笑する。
地球のジュピター・ステーションは〈逸失の日〉の前から存在していた施設で、増設に増設を重ねてきたということ、そのため内部は広くて迷路のようになっており、エアポケットのような場所もいくつもあるのだということは、ホイヘンスも知っていた。
地球は、ピネロン星と直接交流するようになってからは、共に木星周辺の豊富な資源の開発を行うようになった。ただ、以前のピネロン側の宇宙船は、地球側のサポートがなければ木星の巨大な重力や磁力に対応しきれず、そのためピネロン側は、頻繁に自国との往復をしなくてすむよう、ステーション内部の一部区画を間借りし関係者を定住させていた。
関係者とは、労働者がほとんど。彼らはステーションをいわば宿泊施設として使っていたのだが、その中にピネロン星からの亡命希望者がひそかに隠れ住むこともあったという。
「逃げ切れなかった連中……いや、逆にわしから逃げた奴らもいるんだろうな」
「ホイヘンス様、だからそういう連中は、いつものように無視して……」
「そうはいかん。あそこにいたかもしれないからだ」
「……は？」
「あそこにいたかもしれなかった。だがいなかった。だからわしの用は済んだ。後はハチュンにまかせる」
「？？？い、いったい誰をお探しだったんで？ラフラスども以外に、誰をお探しで？……ひっ！」
ホイヘンスは黙れとばかりに、電子鞭をイモシに突きつけ、にらみつけ、

「だから用は済んだと言っておる。あそこにいる連中は切り捨てるから安心しろ」
「し……しかし」イモシは訴える。「ホイヘンス様、残念ながらあの者たちは切り捨てられなくなりました。地球の連中は卑怯にも、彼らの画像をわが星一帯に流し、おかげで彼らの存在が国民の知るところになってしまったんですぞ。こんな事態を招いたレガイテは罰しませんと……。このままでは木星を手に入れても、ホイヘンス様は同胞を見捨てたのかと言われ、今後の治世にも影響……」
「わめくな！地球人どもは自分たちの悪辣ぶりを自分たちの手で公開したのだ。ならレガイテの功績だ。地球が追い込まれてることを、こうやってありありと見せつけてくれたんだからな。
あそこにいる連中のことは、スパイ、売国奴だったと宣伝すればすむことではないか。実際スパイがいるのかもしれんしな」
「ですが、子供までいるとなると……」
「地球人どもが自分たちの首をしめることになるよう、ハチュンに戦略を練らせるまでのこと。そのためにも、宇宙船と戦闘機をどんどん送り込め！」
「ま、前にも申したように、そう簡単には……。一台の改良には時間がかかると……」
「時間はない！まもなくビッツは大軍を送り込んでくるはずだ。こちらも数を送れ！改良が途中なものは盾にするように配備すればよい。スピンを急がせろ！わがピネロンが誇る優秀な軍事技術者とやらに」
「あ……はい！」
ホイヘンスはイモシに背を向け、少し離れたところに立っているヤートに向かい、楽し気に声をかける。
「気分はどうだ？」
ヤートは顔をプイと横に向け、
「最悪だ。頭がかゆい！」
彼の頭には、ヘッドギアのようなものが付けられていた。
ホイヘンスは得意げに、
「いいツラだ。これからはわしを笑えんな」
そして、振り返ってイモシに向かい、
「イモシ、スピンへの指示が終われば、ここに戻れ。こいつの頭のものを説明せよ」
「あ……はい」
振りまわされるイモシは、さすがにうんざりげな顔。

戻ってきたイモシは、はぁと深呼吸し、説明を始める。
「ご存じのとおりわれわれピネロン人は、幼少期に脳波センサーを腕にはめ込みますが、それはわれわれの社会のインフラを動かす鍵になるにすぎず、脳波のパターンをザッと拾うにすぎません。脳波の詳細を拾うには、センサーを直接脳に埋め込む必要があるのですが、ここではそんな手術はできません。なので当面はこれで……」と、ヤートのヘッドギアを指さし、「これでこやつの脳波を遮断できます。こやつがこれを外そうとすれば、ホイヘンス様の電子鞭から警報が鳴るしかけです。もしこやつの脳波を生かそうとすれば、

ホイヘンス様が許可すればいいのです」
「許可するとは？」
「新しくつけた二つのボタンの……そう、そちらです。そちらを一回押せば警報が止まっていったん許可に、もう一回押せば元の遮断状態に戻り……」
「うわっ！」
ヤートが叫んだ。
その場に倒れ込み、頭を抱え込み、うめく。
イモシはあわてて、
「違います！そちらの赤いボタンは懲らしめ用で！……ホイヘンス様、リセットしてください！もう一度その赤いボタンを押して！」
ホイヘンスがそのとおりにボタンを押すと、ヤートのうめきはやんだ。
ヤートは、はぁはぁと息を切らしながら、ゆっくりと立ち上がり、
「ね、寝てる間にこんなものつけやがって……！これじゃあ孫悟空だ！ふざけやがって！」
と、イモシにとびかかろうとするが――
「うわっ！」またも頭を抱える。
ホイヘンスが面白がって、ボタンをいじくっていた。
「なんだ、捕虜たちのと同じしくみのボタンか」
「そのとおりで。それで完全にこやつを支配できます」
「支配だとぉ？」ホイヘンスは意地悪げにイモシを見やり、「きさま、顔をそこまでひっかかれおってか？」
次いで、まじまじと自分の電子鞭をじろじろ見やり、
「ボタン以外には何もつけていないな。きさまにずいぶん長くあずけてたからな」
「ほ、ホイヘンス様、何をお疑いで！それ以外のことは何も……」
「フ……」
ホイヘンスは意地悪そうに笑う。
その横から、ヤートの裏返った声が響く。
「こんなものを頭につけた人間を、ここに来る途中で大勢見たぞ！」
「！」
ホイヘンスは笑うのをやめ、ヤートの方を向いた。
ヤートは、自分のヘッドギアを指さした
ホイヘンスは完全に真顔になった。

（六）

ホイヘンスは、すぐにスタスタと後ろの机に動き、上に置いていた紙をとり、ヤートの前でパラリと広げた。
「この絵を描いたそうだな」
そこには、遊星仮面の上半身のスケッチが。ほぼ正確な姿だ。
「イモシのコンピュータ解析よりも優秀だ」

「ホ、ホイヘンス様、こやつのは想像で……」
「わしの目にもこのように見えたわ！」
ホイヘンスは、まじまじとヤートの顔を見やり、
「目がいいのはたしかだな。ほかには？」
「地球人だけはなく、ピネロン人もいた。働かせてるのか？」
ホイヘンスはその問いには答えず、唐突に、
「ヤート、お前は地球に行ったことがあるか？」
「……はぁ？」
ヤートの気の抜けた顔を見て、ホイヘンスは、はぁと深呼吸をし、上を向いた。
しばらく考え込んだ後、再びヤートに向かい、
「わしは一度だけ地球に行ったことがある。驚いたわ、人間がどこにでも住めるのだ。この星とは違う。この星では、長らく人間が住めるのは限られた場所だった。常にまぶしい酷暑の地と、常に闇で極寒の地との間の地にある、限られた場所だけにだ。しかしそこにも、放射線が過剰に降り注ぐために人間が住めない地が点在してるとくるからな。
だから多くの者がやむなく地下に居住空間を広げていった。地下が惑星全体の交通網となると、そこを押さえたものが覇者となった。地上に追いやられた連中は、地球によくある「離れ小島」とかに住んでるようなもので動きがとれず、地下の連中に牛耳られ、ひたすら命を縮め奴らの食い物を生産するしかなかった。それが地球との交流で流れが変わった。地上にいた者の方が有利となり、やがて血を流して地下世界を手に入れた。
その後も地上派のエリートどもは地球の力を入れ続けた。しかし入れすぎたことがアダとなった。わしら軍人が流した血をエリートどもは無視し、地球との利権をせしめるばかりになった。この星の安定に必要なエキゾチック・マターを切り売りし、さらには……」
ホイヘンスは何かを思い出したのか、左手でぐっと目を抑えた。
そして、振り切るように、ドンと電子杖で床を叩き、
「だが今はわしがこの星を押さえた！戦時体制を備えるためにも、国土整備は急務だ。放射線がこわいからと、歴代の腰抜け政治家が放置してきた〈死の砂漠〉も、今こそ切り開かなくてならん。ピネロンマークがない地球人の体は、われわれよりも放射線には鈍感だ。同胞を殺した報いとして、彼らに働いてもらうは当然のこと！」
ヤートは仰天し、「なに言ってる！センサーがないだけで、地球人だって放射線には弱い！トロント市の市民たちと同じように……」
ホイヘンスは電子鞭をバンと激しく床に叩きつけ「黙れ！あそこにはわしの大切な姪もいたと言っとるだろうが！」
ホイヘンスは息を切らし、今までに見たこともないほどに激高していた。
さらにもう一度、電子鞭でバンと床を叩く。
それで落ち着いたのか、
「まぁ……いい、それよりソンゴクウとは何だ？」
「は？」
またも唐突な質問に、ヤートは驚く。
「答えろ！」
この独裁者は何を考えてるのか？――ヤートは困惑しながらも、

「ぼくの義姉さんが教えてくれた、地球での空想上の英雄だ」
ホイヘンスはため息をつき、
「とことん連中に洗脳されてるな。いや、誘惑されてたのか？」
「ふ……ふざけるな！義姉さんを侮辱するな！義姉さんはやさしくて……」
「いいか！地球人はお前の義姉のような人間ばかりではないわ！むしろ少数だ。今回も奴らはわしらの同胞を人質にして、盾にして、攻撃をかわそうとしているのだ」
「あんたもトーカサス星で、同胞を切り捨てようとしたじゃないか！」
「あれは敵に魂を売った輩だ」
「兵士は違うだろ！」
「兵士は国に殉ずるのが仕事だ」
「外道！いったい地球をどうする気なんだ？」
「まずは報復する、まずは。そのためにはあらゆる手段をとる。だから、これからはお前はこれからはわしのために働け！」
「……は？」
「いや、この星のために働くのだ。それが、ラフラスという姓をもつお前の宿命だと思え！」
「？」
「わからんでもよい。要はわしのそばにいて命令に従え。でないと先ほどのような目に合わすぞ！」
「ホ、ホイヘンス様……？」
あわてるイモシを、ホイヘンスは叱咤するかのように、
「お前は、遊星仮面とやらの解析を急げ！それと、スピンに命じて宇宙船の改造を急がせろ！どんどん送り込むんだ！」
ホイヘンスはそう言ってヤートにもイモシにも背を向け、地上にいるレガイテ・シアルへの指示に移った。
怒りを見せるかと思いきや、じつは冷静。独裁者の本音をはかりかねるヤートであったが、
（ぼくの姓……？）
いきなりの謎に戸惑っていた。
現在のピネロン人の姓の大半は、地球との交流が始まってつけられたもので、血縁よりも地縁に基づいていることが多いと聞いてはいたが――
（いったいこの男は、ぼくの何を知ってるというのだ？）
しかし、それ以上ヤートが考え込める時間はなかった。
「ホイヘンス様！」
突然ハチュンの声が響き、彼の上半身がモニターに映し出されたからだ。
「ステーションの奴ら、われらの同胞を船に移していました。実際に盾に使う気です」
「関係ない。邪魔なら兵士同様排除し、ステーションを占領しろ」
「いえ、それが……現在彼らのライブ映像を、わが国民に見せているとのことでして……」
「……どういうことだ？！」

その少し前――
ジュピター・ステーションに向けたビッツの指示を盗聴して、ピーターはあぜんとなっていた。
（どういうことだ、一般民衆を人質に使うのか！）
さらに、まもなく地球の大艦隊が木星へと向かうという。
この戦いが地球の運命を決めかねないものになることは理解できた。しかしこのままでは、勝つか負けるかだけではすまない結果ももたらしかねない！
ソニカが心配し、心痛める人々が、理不尽にも人間の盾にされているのだ。
さらに朝に見た光景が――ステーションにいる夫を返してください、との女性の訴えに対し、あなたも軍人の妻でしょう、とビッツが平手打ちにした光景が目に浮かんだ。
彼女の夫は、ステーションにとどまっている部隊の副艦長であることを、あとで知った。
（戦闘を、やめさせたい……）
やめさせられなければ、せめてピネロン軍を木星エリアから追い出したい。地球にいる母を守るためにもそれしかない！
個人的事情から感情的に動くとかえって事態の悪化をまねく、とのロペスの言葉も頭に浮かんだものの――
（違う！これは僕の個人的事情だけじゃないんだ！）
ピーターは決意し、トランクを持って、部屋を出た。
「え？」
なにかを察していたのか、リンダが部屋の外で待機していた。
「ピーター、待って、どこ行くの？」
「すぐ帰ってくるよ。……どうしたんだ？」
「おじいちゃまも出ていってるのよ。おねえちゃまとふたりだけになるのよ」
「部屋に待機していれば大丈夫だよ。ソニカを頼むよ」
「ピーター、ダメよ、ピーター！」
リンダはピーターの腕にしがみついた。
「リンダちゃん、離すんだ！」
「ダメよ、おねえちゃまが危ない！」
リンダは離さない。ピーターは途方にくれた。

（七）

木星エリアにて――
巨大な木星をバックに、ジュピター・ステーションが。
磁気圏に守られながら、それに組み込まれない微妙な場所に浮かび、木星周りを公転していた。脱出用の宇宙船を付けたままで。
ステーション本体は、増設に増設を繰り返したためか、いくつもの節をつけ、四方に長く伸びていた。
そのちょうど真ん中あたりに広い空間があり、そこに兵士たちが数十名集結していた。

彼らは集まって、小さなモニターを見ていた。
そこでは、大勢のピネロン人の老若男が、詰め込みに近い状態の中で立ち尽くしている様子が映し出されていた。
パニックとまではいかないが、不安におののく様子がわかる。それは子供たちの表情に現れていた。
「ロイ艦長、やはりこのようなやりかたは……」
温和そうな顔の将校が、眉をひそめ声をかけたのは、最高責任者と思われるどこか横柄な感のある人物にだった。
「また命令にたてつくか?彼らの様子をピネロン星に中継せよとの命令ではなかったのか?盾にして時間を稼げという」
「盾は盾でも、あからさまな人間の盾。これでは地球は卑怯者の集団だと宣言しているようなものです。こうして子供もいるのに……」
「俺を責めるより、前任者の迷惑な情けをなんとかできなかったのか?貴様はその頃から副艦長だっただろうが、シリカス副艦長」
「何度も申し上げてるように、彼らはさまざまな事情で逃げ切れなかった民間人です。地球の収容所は定員オーバーですから、人道的な立場からここで保護してきたのです」
「ふん……まぁ住み着いてれば繁殖するわな。まるで鼠だ。しかしまさか、ピネロンマークのない者までいるとは思わなんだわ」
「それは……ピネロン人にもピネロンマークがない者もいて、迫害の対象になっているのだと聞いたことがあります。おそらく本国での弾圧を受けて逃れ、紛れ込んできた者たちでしょう。彼らはともかくも、こうして子供を映像の前面に立てるのはあまりにも……。向こうの一般民衆の感情を考えれば」
「だからこそ時間稼ぎができるのだ」
「しかし……ホイヘンスが彼らを見捨てればどうなります?ああやってひとまとめにしていれば、彼らをとり払えさえすれば、こちらへの攻撃もしやすくなると考えるのではないでしょうか?
そもそも総司令からの命令は、彼らを写せであって、詰め込めとはおっしゃってはいません。しかもあの船はこちらにとっての唯一の船。援軍が来る前になにかあれば私どもの脱出手段はなくなります」
ピネロン人たちは、脱出用の宇宙船に押し込まれていたのだ。
シリカスは訴える。
「なによりも、この状態は劣悪そのもの。女性や子供だけでもいったんステーション内に戻すべきです」
「ダメだ!スパイが紛れ込んでいる可能性も考えろ!それにわれわれは少人数だ。戦闘と彼らの管理を両立できない。そのためにああやって隔離したのだ」
「艦長!」
「物事は結果だ。結果が正しければいいのだ。だから彼らは援軍が来るまでの盾とする。それが証拠に、ビッツ総司令からは何も言ってこないではないか!」

そのビッツは、遠く離れた地球の司令室からシリカスたちが見ているのと同じ画面を大きなモニターで見、眉をひそめていた。
非常に険しい表情で、腕を組んでいた。
「ビッツ総司令、これはどういうことです？」
女性の声。ビッツが上を見上げると、青いヒジャブで頭を覆った太めの眉の、四十歳ほどのふくよかな女性が別のモニターに映っていた。大統領のアデルだ。
「誰です、ステーションの責任者は？こんなものを流して」
「地球には流してません」
「へ理屈言わないで！あとあとの和平交渉にどれほどの障害が出ると思ってるのです？すぐに止めてください！いえ、止めなさい！」
「あなたのご許可はいただいていますが……」
「私は、関係者に生存情報を知らせるために許可したのであって、こんな卑怯なまねを公開するために……」
「交代したばかりの艦長が、まじめに動きすぎているようです」
「地上での拘束に続いて、今度は宇宙での盾ですか？これ以上地球人の誇りを地におとしめるのはやめなさい！」
「お言葉ですが……」ビッツはアデルをにらみつけ、「あなた的にあとあとのことを考え、利権を回収しようと考え、われわれ軍事部……いや今は防衛部になりましたが、その関与を減らそうと戒厳令をしくのを延ばした結果、どれほどの人命が奪われたとお思いです？」
「……」
「たしかに、これは少々やりすぎだと私も思います。しかし今は地球を守ることが第一。正直手段など言っていられない。和平など考えられない今では、誇りでは命は救えない。ともかく援軍が送れるまで、現場にまかせるしかないのです」
「ピネロン星で囚われた同胞に危害が加わることを、考慮しないのですか？」
「それ以上に、地球にいる莫大な数の民を守らないといけません。ご親族……たしか甥御さんでしたね。無事に帰ってこられましたので、あなたにはもはや損害はないとは思いますが」
「何度も言ってますが、私はリース財閥とは別物ですよ。父とは縁を切っております」
「世間はそうは思っておりません」
「……ビッツ総司令、あなたこそ、その世間をいつから欺いてきたのです？」
「欺くなど短絡的な……。それよりあなたこそ、今後の逆風にお気をつけください。
あなたは、あなたのご実家がわれわれ軍を無視して推し進めた原爆処理に関し、ピネロン側に支払うべき金を、戒厳令をしく前にそそくさ回収しておりますね？縁を切ったとかいうご実家を救うためにですか？」
「あなたは！……ええわかりました。あなたではダメですね。ニックは？ニック副司令は？」
「今少し席をはずしております。私どもにもこの映像は想定外でしたから」
――ニックは少し離れたところでいた。
座り込み、青い顔をして頭を抱え、目を閉じ息を切らしていた。
彼の脳裏には、狭いところに押し込められた人々の呻き、子供たちのわめき声、女性の

絶叫……。
（フラッシュバックというものか……？）
片手で片耳を閉じ、もう片手で胸を軽く胸を叩く。
何度も何度も胸を叩き、やがて落ち着く。
そして、何事もなかったかのように、すっと立ち上がった
いきなり目の前にニックの姿が現れ、部屋に入ってきた兵士は驚く。
「ニック副司令？どうなさったのです」
「あ……いや、どうしたんだ？」
「ピネロンの戦艦から連絡がありました。まもなく攻撃を加える。抵抗すれば殺す……と」
「なんだと！」
ニックは青ざめた顔でつぶやく。
「ホイヘンスも、同胞を見捨てるのか？」
ニックはきつく歯をかみしめた。

それは――少し前のことだった。
木星軌道上に集結したピネロンの宇宙船。
軌道の違いで、地球のジュピター・ステーションからは離れたところにいた。
その船団のトップにある宇宙船には、ハチュンが乗り込んでいた。
彼の前にあるモニターにイモシが映る。
「電波遮断器は届いたか？」とイモシ。
「このとおり」
「組み立て方がわからねば、すぐに連絡をしろ。子供の映像などこれ以上流されてはたまらんからな」
「はい」
「こちらでも電波遮断の手配に入っておる。映像が遮断されしだい指示を送る。地球側の援軍が着く前に、できるだけカタをつけよ。なお、地球側の援軍はローカル・ワームホールを使ってくるはずだからどこに着くかわからん。油断はするな」
「了解！」
「ハチュン」とホイヘンスの声。
画像も、ホイヘンスの姿に代わった。
「援軍はまもなく送るが、それを待っていては、地球側の援軍が先に到着してしまう。心して攻撃に移れ」
「はい」
「施設の被害は最小限にして、必ず占領しろ。自爆はさせるな。あの重力圏内で新たに拠点を建設するのは大変だ。木星の資源確保は困難となる。それになにより、ローカル・ワームホールの記録データが入手できなくなる。
そのデータが手に入れば、木星からの地球侵攻は容易となる。まだ消去はしていないはずだ。データが無いと、木星に艦隊は送ってこれないからな」
「了解！」

「なお地球兵は捕虜にする必要はない。殺せ。敵に威圧と恐怖を与えるのだ」
「……われわれの同胞は？」
「あとで情報操作を行うから気にせずともよい。ライブ映像が途切れれば、もはや何をしても責めぬ。始末してもよい」
「……子供もですか？」
「優先事項ではない。命令に従え」
「あ……はい」
「ホイヘンス！あんたは！」
後ろから大声が。ヤートだ。
ホイヘンスはあざけるように、
「同胞を見捨てるのか、とでも言いたいのか？……ふん、甘いわ！あの基地を奪わなければ、奴らいずれこちらに攻撃をしかけてくるわ」
「子供を見殺しにするのか？」
「お前のレベルに従って言えば、この星に残る数多の子供の命を守るが優先、同胞の仇を取るが先だわ」
「遊星仮面とやらが現れては？」
「！」
すぐにホイヘンスの顔が、みるみる変わった。
それをヤートは見逃さなかった。
「あんた、何知ってるんだ？」
「黙れ！」
ホイヘンスはそう叫んで、電子鞭をヤートの顔に突きつけた。
凍りついたヤートを見て、ニヤリと笑い、
「お前たちに見せてやる、わしは最強だ。わしが一番なのだということをな！」
……お前たち？
ヤートは首を傾げた。
お前たちとはいったい……。

そしてホイヘンスは、ジュピター・ステーションへの攻撃の命を下した。

（八）

そのジュピター・ステーション内は、パニックになっていた。
「ロイ艦長は見つからんか！」
いつのまにかロイの姿が消えていたのだ。
ピネロンの宇宙船がどんどんとり囲んできている。
まもなく攻撃はある。
しかし、地球からの援軍はまだ来ない。

兵士たちは絶望的になっていた。
「副艦長！もうダメです。降伏を」
「ダメだ！この基地をとられては、地球への直接攻撃に結びつく。木星資源までとられてしまう」
「だったらいっそのこと、この基地を破壊すれば」
「われわれはどこに退避するんだ？もう船はないぞ」
「さっき副艦長がおっしゃったように、ピネロン人たちをここに戻して……」
「彼らを船につめた時の混乱を忘れたか？さっきとは状況が違う。もうそんな時間はない！」
シリカスは続ける。
「いいか、ここには木星エリアと火星エリアとをつなぐローカル・ワームホールの記録データがある。これが今ここにないと援軍が到着するまでの道しるべにはならない。だからわれわれは、味方が来るまではデータを守りきらないといけない！
それにこの基地を破壊したとしてもだ。敵はいずれ自分たちの基地をつくるだろう。船をあそこまで短期間で改良できる力があるなら、それも時間の問題だ。そうなっては、われわれがあらたに基地を建設するのは困難になる。だから……」
シリカスは、いったん話を切り、深く深呼吸をしたあと、
「だからこの基地は絶対に死守せよ！それが地球からの命令だ！」
「ああ……」
部下たちは頭を抱える。
そして、それぞれが悲痛に訴える。「だったら、その前に少なくとも、家族に連絡を……」「私にはまもなく生まれてくる子供が……」
シリカスは一喝する。「家族への遺言は、すでにひとりひとり、前もって司令部に送ってあるではないか」
しかし――と部下たち。
「あれはもしものことがあった場合に備えて。今は状況が違います！」「家族と直接連絡をとりたい」「声が聞きたいのです！」
「くどい！実務中での個人連絡は禁止だ！これは軍令だ！」
「しかし……！」
部下たちの必死の嘆願に、シリカスは、はぁとため息をついた。
「……わかった。たしかに事情はそれぞれにあるだろう。だったら、生きのびたい者はあの人質船に移れ！」
「え？」
「敵もさすがに同胞にまでは積極的には手を出さんだろう。可能性は低いが、うまくいけば人質として生き残れるかもしれん」
「な、なにを！」部下たちは絶句する。「そ、そんなことはできません、そんな卑怯な……」
シリカスは声を絞って答える。
「卑怯なのは、彼らをああやって盾を立てた時からそうだ。何をいまさらだ！
それよりも、先ほどロイ艦長が言ったように、経過ではなく結果だ。どんな形ででも生

き延びて、遠巻きに地球のために策を練るやり方もある。それも有効な策になるかもしれない。
　しかし……私は不器用だ。家族を守るためにここを死守する。軍の命令を守るためにではない、自分の妻や子や老いた両親を守るためにだ。彼らがいる地球を守るためにだ。だから、たとえここで命がついえることがあっても、援軍が到着するまでの時間稼ぎができれば、絶対にムダ死にはならないと、私は信じる！」
　場はしずまった。
「わかりました……」「私もここを残ります」
　部下たちは次々同意する。
「ではみな武器をもって持ち場に戻れ！緊急事態として、艦長不在の間は私、シリカスが指揮をとる」
　部下たちも同意し、散らばっていった。

　部下たちが散らばったあと、緊張の切れたシリカスはその場に崩れそうになった。
（みんな、すまない……）
　じつは、部下たちに伝えていないことがあったのだ。
　もしどうしてもこの基地を守れない事態となれば、その場合は基地を爆破しろとの命令が、ビッツから届いていたのだ。
　ローカル・ワームホールのデータだけは、どうしても敵にわたしてはならないと。
　基地自爆はそのための最後の手段。それは、逃げ場のない自分たちの死も意味していた。
（つまり、そうなることが必然なのだ。ほぼわれわれが生き残れないことがわかっているのだ。それでも最後まで抵抗しないといけない……）
　シリカスは、立ち上がり、再び人質船の内部映像の確認に向かう。
　シリカスの脳裏には、船に移動させたさいに泣き叫んだ子供たちの姿が映っていた。
　自分の子供たちの姿と重なった。
（許してくれ……）
　それでも、こうやって自分たち地球人と分けたことで、彼らにとっては生き延びる確率が増したかもしれない。
　そう自分に信じこませようとしていた。
　しかし――
「え？」
　モニターには何も映っていない。
　画面を拡大しても、何も映らない。
　何度操作しても動かない。
「おかしい……送信機が壊れてるのか？」
　そこに――
「副艦長！たいへんです」
「敵か。もう来たか……」
「違います！船が……ピネロン人どもを乗せた船が、勝手に動いて……」
「なんだって！」

ピネロン人をつめこんだ人質船が、勝手にピネロン艦隊の方向に動いている。
これには、総攻撃直前のピネロン側も仰天。
「いったい！」
ハチュンは叫ぶ。
「どういうことだ！」
地球側のステーションでも、驚きと戸惑いと、叫びが。
「いったい誰が……？」
船への連絡もできない。
意図的に、ステーションとのすべての通信が切られているのだと察した。
「もしや……もしやロイ艦長が……」
シリカスはぼうぜんとした。
考えられないが、考えられる事態だ。ではなぜ……？
一方で、ハチュンは決断に迫られた。
攻撃か？しかし中には同胞が詰め込まれている。では脱出なのか？助けを求めてきているのか？
部下たちは攻撃体制に入っていた。
ハチュンはあわてて止める。「待て、撃つな！」
「救出するなと、ホイヘンス様が……」
「優先事項ではない、ということだけだ」
「罠かもしれません」
「様子を見る」
そんななか――
ピネロン側に近づいてきた人質船は、いきなり大爆発した。

何が起きたのかはわからなかった。
しかし、そこにはたしかに人がいた。それも民間人がいたのだ。
吹き飛ばされ破壊された金属片にまじって、人体の破片が、服が、子供が持っていたと思われる人形などが当たりに舞いながら、木星の重力に引き込まれてゆく。
「ハチュン一尉！」
「……もう無理だ」
ハチュンたちは皆、ぼうぜんとしていた。
もはや、救出はできない。
「あいつらが、地球の連中が……」
「待て！向こうからは撃っていない！」
地球側でも同じことを言っていた。
「ピネロンが撃ったのか？」「いや……違う」

――何が起こったのか？
それでもピネロン側にとっては、同胞の、それも大勢の民間人が目の前で命を奪われたことには変わりなかった。
こみあげる怒りが、ピネロン兵士たちを押し上げた。
彼らの激情に、ハチュン自身も飲み込まれていた。
「ゆけ！仇をうて」

（九）

ステーションに乗り込んだハチュンたちピネロン兵は、つぎつぎと攻撃をかける。
人の数も武器の数も圧倒的で、さらに士気の高さが加わっていた。
地球側も武器を最大限に駆使するが、かなわない。
ハチュンは、降伏する者もかまわず殺せとの命を下す。
シリカスは必死で抵抗するが、部下たちは次々と倒れてゆく。
「うわ！」
シリカスもついに銃を撃たれる。
倒れ、脇腹を押さえた彼のもとに、ハチュンが飛びかかった。
懐からナイフを取り出す。とどめをさすために。
しかし――
「うわああ！」
光の筋にたたき出された。
「だれだ！」
転がったハチュンは、体をあげ、見上げた。
そこには、あの捕虜交換の時に見た、あの謎の人物の姿が。
「お前は誰だ！」
問われた側も、ハチュンのことは覚えていた。
だから答えた。
「人呼んで遊星仮面！」
そして、光の手裏剣――シューターを放ち、
「ここから去れ！」
シリカスを守るように、ハチュンの前に立ちふさがった。

（もっと早く着いていれば……）
遊星仮面――ピーターが、なんとかリンダを振り切って現場に着いた時、真っ先に彼の目に飛び込んだのは、破壊された人質船の惨状だった。
現場に向かう途中、ビッツがいる司令室からの盗聴を続けていたが、爆破の瞬間にはニックの叫び声が。それ以降は、ビッツの声しか聞こえなくなっていた。

ステーションを守れ！地球を守れ！と叫ぶビッツの声しか。
そのため急いだものの……間に合わなかった
（もっと早く着いていれば！）
子供が持っていたと思われる人形が、彼の眼前を通り過ぎた。
動悸がおさまらない。
しかし――この悲劇にこだわっている時間はない！
（なんとしてでも地球だけでも守らなければ……母さんを守らなければ！）
振り切るように覚悟を決めて、ステーションに向かい、中へと入っていった。
地球を守るためには、ピネロン兵たちを追い出さなくてはいけないとして。
しかしピネロン兵たちは――ハチュンは去らなった。
ハチュンは、遊星仮面が出現したら映像を記録しろとのホイヘンスの命に従い、左腕に小型カメラをつけていた。仮面が出現するや、それをひそかにＯＮにした。
彼は、この謎の人物が、地球の言葉だけでなく自分たちの言葉も理解できることを知り、そのうえあきらかに敵だと認識した。
排除しないとステーションを占領できないと判断し、部下たちに命じる。
「あいつを殺せ！」
遊星仮面は、関心はすべて自分に向けられ、シリカスへの追加攻撃はないと察し、彼から離れた。
あんのじょう、すべての攻撃が自分に向けられてきた。
次々かわし、兵士たちの武器に向けてシューターを放つが、追いつかない。
（なぜここから去らないんだ！去れ！去ってくれ！）
苛立ちがつのってくる。
そのうちに――
「うわっ！」
手がすべったのか、ピネロン兵の胴体にシューターが刺さった。
飛び散る血しぶき。
（ああっ！）
遊星仮面、いやピーターは、心の中で叫んだ。
ピネロン兵たちも、はじめて後ずさり。
しかしすぐに、倍の勢いで攻撃をかけてくる。
やまない敵対心。ピーターは恐怖を感じていく。
（来るな、来るな、やめてくれ！）
動揺するなかでシューターを放つと、またも兵士の体を引き裂いた。
――繰り返す中で、ピーターの中で何かが裂けた。
躊躇と制御の理性が、吹き飛んでいった。

……

気づいた時は、ステーションの上に立っていた。
下には、破壊された宇宙船から投げ出された兵士たちの遺体が。
その姿を見たとき、ハッと正気に戻った。
人質船の破壊の映像とかぶさっていた。
（僕が……これを……？）
手が震えた。たしかに自分が行ったことだ。
追いかけて、追いかけて、彼らが乗った宇宙船をも粉砕してしまっていたのだ！

ピーターにとってはセピア色の記憶と化した一部始終の出来事を、ホイヘンスたちはしっかりと見ていた。
「やはり地球の犬だったか」とホイヘンス。
「あれはなんという武器なのか……それにしてもなんとも躊躇がない」とイモシ。
ヤートも、彼らのうしろで、ハチュンが撮った一部始終の映像を見ていた。
ホイヘンスは振り返り、ヤートの耳もとでささやく。
「わかったか、ヤート、これが地球人の野蛮さだ」
しかしヤートは、何も言い返さずに、考え込んでいた。
あの捕虜交換の時に見た遊星仮面の目は、狂ってはいなかった。
というよりも、自分と近いものを感じとっていた。
それにあのレーザー武器だ。どこか親近感を感じていたが、その理由がわかった。義姉の面影があるのだ！
レーザー機器開発のスペシャリストであった義姉の研究を、どこか思い起こさせるものなのだ。
（いったい何が起きてるのか――それを知るためにも、ぼくは兄と義姉を探さないといけないんだ。それに母さんや父さんも……）
あの遊星仮面が地球の犬だとすれば、自分はこのホイヘンスの犬ではないか！
このままではいけない、ここを出なければ！
ヤートの決意も知らず、ホイヘンスは戦局に集中していた。
「ホイヘンス様、援軍が今到着しました！」
ハチュンの姿がモニターに映った。
頭には、血がにじんだ包帯を巻いている。
命からがら、生き残った部下たちとともに船に引き上げていたのだ。
ホイヘンスは彼を鼓舞する。
「今一度命じる。もう一度乗り込み、今度は部下たちの仇をとれ！」
しかし――
「ああ！」ハチュンが叫ぶ。
「どうした？」
同じ頃、ピーターも叫んでいだ。
「ああっ！」
信じがたい光景が、彼らの目の前に展開していた。

ピネロンの大艦隊に、突如現れた別の艦隊が、次々おおいかぶさっていたのだ。
現れたのは地球の大艦隊であった。
ちょうどローカル・ワームホールの出口が、ピネロンの大艦隊がいるところに重なり、偶然にもぶち当たったのだ。
意図せぬ体当たりで、次々破壊されるピネロン艦隊。
こうなると、木星環境に慣れた地球艦隊の敵ではない。

「ホイヘンス様、撤退命令を！これ以上の損害は……」
ハチュンの悲痛な叫び声が響く。
ホイヘンスとイモシはモニターにくぎ付けになり、背後にまでは気をまわせていなかった。
「うわっ！」
ホイヘンスは倒れ込んだ。
ヤートがうしろからホイヘンスを突き飛ばし、彼の電子鞭を蹴り、床に飛んだそれを奪い、逃走したのだ。
「しまった！追え！」
ヤートは、電子鞭を持ったまま、基地内をなんなく突破していく。
途中で銃も拾う。
ここを逃げ出す！なんとしてもホイヘンスのもとから離れる！そして……彼を倒す！
しかし――
宇宙船置き場で、戦闘機を奪おうとしたところで、兵士たちの阻止が入った。
（殺される！）
ヤートは電子鞭を離し、両手でぐっと銃を握った。

（十）

宇宙には船体の破片が散乱。ただ静けさはだけは戻っていた。
そこから少し離れたステーションの中を、遊星仮面、いやピーターは進んでいた。
（うっ！）
想像を絶する状況だった。
手足や内臓があたりにまき散らされていた。爆弾がいくつもさく裂したらしい。
地球側による覚悟の自爆攻撃なのか、全員殺戮を目的としたピネロン側の攻撃なのか、わからない。ともかく犠牲者には、地球兵もピネロン兵もいた。
足元に気をつけて進んでも、ぐしゃっぐしゃっと、なにかを踏みつける。
やがて、銃でやられた傷、さらには鋭利な刃物のようなものでスッパリ切られた傷がはっきりわかる遺体が。
（これはもしやシューター……僕がやったのか？……）

倒れ込みそうになった。
目を閉じた。息が荒い。
そんななかで――
「しっかりしろ！」
背後から聞き覚えのある声が。
ロペスであった。
（な、なんで……ここに……？）
やはりあの時、民衆に銃を向けようとしていたキニスキーを殺そうとした自分を止めたのは、この人だったのか！
ある意味安心し、力が抜けた。
「僕は……誰も守れずに……」
ぼうぜん自失と化したピーターを、ロペスは背後から支える。
「しっかり！副艦長ふくめ十数人は、負傷はしてますが無事デス」
「これを……これを……僕が……」
「よくやってくれました！君は地球を守ったんです。君がいなければ援軍が到着する前に、この中は全滅でした。できる限りの、いや膨大な命が守られたんです」
「命……」
そのぶん、別なところで奪ってしまったではないか！
そう感じ、ぼうぜんと振り返ると、そこにいるのはロペスひとりではなかった。
顔を含め全身をスーツのようなもので覆った、身長の低い人間たちが彼のまわりに数人いた。
「気をしっかり！急いで！……まもなく援軍本隊がここに入ってくる。その前に協力してほしい」
ロペスにポンと肩を叩かれ、ピーターは前を向いた。
そういえば、子供たちの泣き声がする。
見ると、先ほどの小人のような人間たちが、数人のピネロン人の子供たちを連れ、立っていた。
「すみにまだ隠れてました。この子たちを助けてください」
「なぜ……」
「昔ここは私の遊び場だったんですよ。中は知りつくしてます」
そう言ってにこっと笑った。

地球の司令室――
ライブでは流されなかった人質船内の映像が、あらためて再生されていた。
そこには、爆破直前の状況が映っていた。
ロイの姿があった。やがて船が動きだした。しかし、数人の男たちが暴れだし、中は大混乱に。そして男たちが放った銃が何かに引火し、爆発が起き、映像が切れる。
「これは……どういうことなの？ロイは……彼はひとりだけ逃げだそうと？」とアデル。
「いや……攻撃をやめさせようと、あわてて人質とともに交渉に向かったのかもしれませ

んが」とビッツ。「しかしピネロン人たちのなかに、自分たちが再びピネロン側に、つまりホイヘンスに引きわたされるのを恐れた連中がいて、彼らが絶望して自爆した。そう解釈すべきでしょうな」
「なんということを……」
アデルは絶句していた。
ビッツはあごひげをさわりながら、ふうとため息をつく。
ニックはビッツの横にいた。憔悴し、椅子に座り込んでいた。

司令室から見ていた映像は、ジュピター・ステーション内から再生しているものだった。
操作していたのは、ひそかに軍服を着込んで潜入していたパイクとマック。
マックは横で、げーげー吐いている。
「なっさけねぇなぁ、死体を見たぐらいで」とパイク。
「あ、兄ぃは平気で？」
「今は商売態勢よ！」
そう言い放ちながらもパイクは、眉をひそめ、ぶつぶつつぶやく。
「ライブ中継が終わっても映像を撮ってたってことか？撮っていたのを忘れてたのか？……どちらにせよまぁお手柄だよなぁ。ほかの通信は切っても、この最後の映像データだけは送ってきてたってのも、偶然なのか意図的なのかは知らんが。
それにしても……ああ胸糞悪い！」
映像が流れ終わると、すぐにパイクの携帯機器が光った。
パイクは耳に近づけ、何度もうなずく。
マックには、その声は聞こえない。
「なんて言ってきてるんで？」
「最初の、ロイ艦長が映ってるシーンだけ切って、そのままピネロン星に流せとよ」そう言って、パイクは携帯機器から耳を離す。「編集されたと思われないように、向こうの国民に向けてすぐに流せとのご命令だ。いきなりなら、向こうで映像を保存するタイミングも防げるだろう、とよ」
パイクはステーション内の映像を巻き戻し、手持ちのカバンから小型機械を取り出し、作動させる。
「ピネロンの連中、ライブ中継は途中で切ったらしいが、まさかまた別の周波数で送ってくるとは思ってないだろな」
小型機器は、送信の反応を示す光を放ち続ける。
マックは安堵した顔で、「これで地球が悪いんじゃないとわかってくれるよな」
「甘いわ！」
「へ、なんで？」
「たとえ爆破したのが同胞だとわかってもよ、そもそもこんな状況をつくりだしたのは俺ら地球人だ。その事実は変わらない。恨みと不信はつのるだけよ。それが人間てもんだろう？」
「はあ……」

「それに映像が保存されないなんて誰も信じちゃいねぇよ！一部でも保存されたら、それを使って自分たちに都合がいいように編集するだろうが！民衆は、最初に見たライブ映像のことなんか忘れて、編集された映像を繰り返し見て、ますます地球憎しととなるはずよ」
「……じゃあ、なんで」
「地球向けだよ。地球が悪いんじゃないんだと自国民に思わせためにだ。だからこれも、もう一度司令部に向けても流す。あとで国民向けに流すだろうよ。
　同時にこれは、ピネロン側に対する証拠だ。向こうが映像を加工してきても、いいやこちらがオリジナルだ、と言い張るためのな」
「はあ……また手の込んだ」
「そんなもんよ、どこまでも戦略。民間人の死などどうでもいい。おえらさん方が人道をかかげても、しょせんこんなもんよ。俺らもしょせん捨石だからな。だったら、どっちに転んでもいいように保険をかけるまでだ」
　と、懐からとりだしたのは、ビデオカメラ。
「古！　兄ぃ、それいつのもんだ？」
「古い機器は検知されないからな」
　ステーションの映像が再生されている横で、ビデオカメラの映像も再生する。
　そこには、ステーションの上で立つ遊星仮面の姿が。
「ほほぉ、拡大できるな。結構きれいに撮れてるな」
「そいつ、さっきの！」
「隠し撮りよ。のちのち口封じされて消されないよう、ジャーナリストの端くれとして盾となるネタをせっせと仕入れておくまでだ」
「すげぇなそいつ、人間か？」
「最近話題の不審者。いや地球の味方か？……遊星仮面というそうだ。こいつの正体を調べてやる」
「正義の味方ということか？」
「バカやろ、そんな者いるかよ！……戦争に正義もクソもねぇよ。民衆を……女子供を巻き込まない戦争も戦場も、ありゃしないんだから」
　そう言いつつパイクは、ちょうど目の前で再生されている爆破の瞬間を、眉をひそめて見つめていた。

それから何時間かが過ぎた。
ピーターがよろよろと、ソクラトン邸に戻ると、リンダが血相を変えて飛び出してきた。
「ピーター、どこへ行ってたの？おねえちゃまが、おねえちゃまが！」
「ソニカが？」
聞くと、ソクラトンと自分が不在中、キニスキーが乱入し、ソニカを連れ去ったらしい。
（ああ……）
「ピーターのバカバカ！ピーターのせいよ！勝手に出ていくんだから！」
　リンダは涙を流しながら、ピーターの胸を叩く。

ピーターはぼうぜんとし、
（そうだ……僕のせいだ……僕は母さんもソニカも守れなかった……子供たちも守れなかった！）
へたへたと、その場に座り込んでしまう。
「ピ、ピーター！」
リンダは驚き、
「ピーター、どうしたの？！どうしたの？！」
大声で叫ぶ。
しかしピーターの目や耳からは、目の前のリンダの顔や声が、どんどんと遠ざかっていった。
代わりに、断末魔の叫び声と、真っ赤に染まった自分の手が見えてきた。
（僕は人を殺してしまった……たくさん殺してしまった……どこか楽しい感じがした……悪魔だ、悪魔だ、僕は悪魔だ！）
やがて、何も聞こえなく、何も見えなくなった……。